
炎の悪魔とエトセトラ。

春夏 愁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の悪魔とエトセトラ。

【Nコード】

N9420Y

【作者名】

春夏 愁

【あらすじ】

ある晴れた幼き日の出会いと約束。13年後の魔法学校でその真実が明らかに！？

品行方正真面目な優等生なミリアの、ちょっぴり苦いときどき悪魔召喚ファンタジー。

（１）（前書き）

2日で書きあげたので、色々へたってますが、皆様の豊富なイマジネーションで補ってくださいませ。

< R - 15 > なんて付けさせて頂きましたが、淡泊なキスシーンのみです。なんかすいません。

(1)

それはある晴れた日――。

「あなたは、だあれ？」

温かな木漏れ日の下、二人は出会った。
それは、小さな、小さな出会い。

「……アスラだ」

少女はまっすぐ手を伸ばす。
赤く、燃える、背の高いものへ。

1、炎は熱いもの

「信じられない！」

日暮れ間近の橙色の陽光が差す中、ミリアは頬を膨らませながら廊下を歩いていた。

こげ茶色の短な髪を揺らしながら、小柄なミリアはすたすたと寮へと向かう。

ここは魔法学校高等部、人々は黒いローブと重そうな本を抱えたミリアを、くすくすと笑いながら横目で見ていた。

「おいおい、どうしたんだ」

ミリアの荒れ具合を見かねた幼い頃からの友人シュラが、寮へと続く渡り廊下で肩を叩く。

シュラはとても印象的な赤錆色の髪を綺麗に立てており、ぱつちり二重に深紅の瞳は女子達の憧れの的であった。素行も不良で、顔も一見強面だが、彫りが深いだけであって整っている。ただ、ミリアからすれば、シュラなんてぐうたらで、おしゃれにこれっぽっちも気を使っていない、こちらから気の使う必要など微塵にも感じられない、ただの幼なじみであった。

そんなことを思っている、口に出せない面倒なお年頃になってしまったのだが。そしてまたこうして二人で話していると、噂が噂を呼び、とんでもないことになるのだが。

ミリアは分かっている、愚痴を感情のままにシュラにぶつける。

「さつき、先輩にこの本に施されている魔法陣の解印をお願いされた。論文に必要な大切な資料だからって。私はいいですよー、なんて普通に答えて、解いてあげたら、図書館の奥深くに封印されていた本だった訳。それでその本にあらかじめ施されていた防御魔法

で爆発するわ、図書館の司書さんから怒られるわ、学園長から睨まれるわ……。

これで！ また！ 私がコツコツと積み上げてきた特体生への道が閉ざされちゃったんだよ！」

ミリアの捲し立てるような早口に、シュラは困ったようにうんうんと頷く。

彼女は魔法学校高等部の魔法学科、魔法文字専攻の生徒であつた。そのため、他専攻の生徒より魔法陣の書き方や解き方、魔法文字や古代語への理解が深い。またミリアは特体生を目指すような真面目で優秀な生徒であり、庶民出身で扱いやすいことから重宝されていた。

この世界には五大貴族と呼ばれる貴族が中心となって世界を動かしている。

炎の一族、水の一族、風の一族、土の一族、木の一族がそれぞれ大陸を支配し、魔法を扱い統治している。現在はその一族も対立はしていないが、緊張状態には変わりなく、高校生同士の揉め事さえ、いずれ戦争に発展するのではないかと危惧されているぐらいだった。ましてや、この魔法学校は優秀な生徒が世界中から集まり、それぞれの貴族の息子や娘が日々鍛錬を行っている。争いの種はどこにでも転がっていた。

その点ミリアは自由なものであつた。

一応所属としては、『炎の一族の娘』となっているが、分家の分家の分家の分家の……というほど、一族本家とはとても遠い存在であり、暮らしも庶民と同じ程度で慎ましやかに暮らしている。ミリア

アは自身、炎の一族の中枢にいる人物に接点がなく、「私は庶民」と断言していた。その方が気が楽であった、ということもある。つまり、貴族間の争いにならない、ということ、進級や単位取得の難しいぼっちゃん、お嬢ちゃんが彼女を頼った。

「特待生ね」

シュラがミリアの最も大切なキーワードを反芻する。

ミリアの家は他の生徒と異なり、この魔法学校に通うのもギリギリであった。そのため、優秀な成績を獲って、品行方正な行動が評価され、特待生になれば、高額な授業料が免除になったり、無償研修旅行に参加できたり、ミリアにしたら夢のような生活が待っている。

毎日毎日図書館や自習室に籠り、教授や講師の雑務を手伝い、みんなのまとめ役も進んでかって出るのはこの為であった。

「そーよ！ 明日はこの減点を補うためにもがんばらなくちゃ」

ふん、と荒い鼻息を漏らすミリアにシュラは苦笑した。

こうしてまた彼女は皆の上手いように遊ばれるのだろうな、と明日の今頃を想像する。

「で、シュラはどーなのよ」

「あ？ 俺？」

聞き役に徹していたシュラに急に話が振られ、彼は戸惑うように視線を外す。

「別に大したことねえよ」

シュラは魔法学科 実践魔法専攻であった。ようするに戦いを中心とした魔法を学習を行う専攻である。

魔具作りにも興味があるようだったので、転籍を薦めたこともあった。

「もう一年生じゃないんだから一般教養の授業は違うし、私がノートとれなくなったら単位とか、進級とか……。学年主任のライラ先生が心配しておられたけど、あんた出席日数大丈夫なの？」

またこの話か、という嫌そうな顔をシュラは作った。

「私はね、あんたが優秀だって知ってるし、この学校に行きたいって言ったから——」

彼女が早口で捲し立てようとした瞬間、シュラの大きな両腕が彼女を抱きしめた。

「え」

ミリアは突然のことで言葉を失う。シュラと密着したことで、ミリアの鼓動が速くなり、顔が熱くなる。

そして、彼はミリアのの焦げた色の髪をかきわけ、額に額をくっ

つけた。

時間が止まったかのように、ゆっくりと感じる、不思議な瞬間。

ミアは小柄な為、シュラは覆いかぶさるようにして、彼女を優しく抱く。

彼の深紅の瞳がミアを捉え、ふんわりと笑った。

「ミリー」

ミアの身体の奥に響く切ない声。ミアの身体が震えた。このようなシュラの切ない声、ミアは聞いたことがない。こっやって幾人の女の子を手玉にとり、落として、泣かせてきたのだろう。

あったかい。

シュラの体温がミアの身体に伝わる。

「って、いつも誤魔化すのやめてくれる？」

ミアはシュラの右足を思いつきり踏みつけた。

「いってえ！」

シュラは突然のミアの反撃にたじろぎ、身体を後ろに飛び退いた。学校指定の制服をダラダラと着こなすシュラのアクセサリーが

鳴る。

「私はね、あんたみたいに暇人じゃないの。」

明日の予習して、明日は早朝から薬草学科の月光花の準備をしないくちやいけないし、召喚学専攻の魔法陣を書きに西の塔まで行くのほら、どいてどいて」

ミリアはしつしとシュラを払い除け、女子寮へと向かっていった。シュラはただ、その忙しい小さな後ろ姿を見送っていただけだ。

その後ろ姿を見ながら、シュラは思う。

彼女はどんなに努力しようと、特待生にはなれない。

ミリアのまわりには、化物のような魔力や魔法量を持つエリート中のエリートや、どんな呪文も唱えられる秀才君、素晴らしい手先を持つ魔具職人がいた。血族による圧倒的な差だ。

そんな中、彼女は魔力も魔法量も普通で、ただ文字の読み書きが得意なだけを取り柄の真面目な女生徒だ。

どんなに教授陣の心証を良くしようが、埋まりようがない差が横たわっている。

「お友達として、色々協力してやってんだぜ。それでも」

シュラの言葉は風に流され、シュラもまた男子寮に向かっていった。

また言いたかったことが言えないまま、一日が終わってしまったことだけを後悔していた。

。

ミリアの朝は早い。

朝4時に起床し、身なりを整える。2人の相部屋である為、相方であるエリスを起こさないように気を配ることが重要だった。

エリスは大雑把な性格で眠りが深い方であったので、ミリアが深夜まで学習しても、このように早朝から活動を始めてもトラブルが少ない。ミリアにとってとてもありがたいことであった。エリスの学科である占星術の手伝いはあまり出来なかったが、一般教養のレポートは手伝ってあげている。昼食と一緒に食べることも多く、一番の親友だと思っていた。

エリスは噂好きだが、女同士の抗争にも縁がなく、占いで両軍を影で操るような、いわば黒幕的な存在である。こういったポジションであったことから、ミリアも救われていた。

「ミリア……」

エリスのベットがもぞもぞと動き、透き通ったような声が響く。

「ごめん、起しちゃった？」

とつさに謝り、エリスの元に近付く。

「西の……塔は、いっちゃダメ……」

「へ？」

彼女の言葉に驚いていると、彼女が再びもぞもぞと動き、寝がえりをうつた。

寝言のようだ。しかし、当たると噂の占い師の言葉ほど怖いものはない。

しかも、今日は行く予定が入っている。

＜魔法学校高等部 召喚術専攻1年生用 召喚術式の刻印

…… 西の塔地下2号 5時限目までに！＞

と手帳を見返してもきつちりと書いてあった。

ミリアはひとつ小さくため息をつくと、

「ありがとう、エリス」と相方に声を掛け、薬草の採取に出かけた。

朝の霜が降りる中庭を通り、北の森の隣に建っている温室を目指した。

この温室は薬草学科の学生が授業で用いる薬草が栽培されていた。学科専攻を問わず、様々な授業を受講しているミリアは、授業終了後も積極的に質問に立ち、教授陣と知り合うことが多い。そこで様々な雑用を押し付けられることもあったが、誠実な対応（成績的な意味で）をしてくれる先生も多かった。そのことを励みに日々頑張っていた。新たに得る知識もミリアにとっては、とても嬉しいことであつた。

かじかむ手を吐息で温めながら、月光花の採取を続けた。

手のひらほどの花弁を落としてしまわないように丁寧に扱いながら、一つ一つ瓶に詰めていった。

朝方の二時間しか開花しないこの花は、様々な薬蕩に用いられるという。

「西の塔、か。どうしようかなあ」

エリスの占いはよく当たる。怖いほど当たるので、欲を言えば行きたくない。

しかし、一度引き受けた仕事を放り投げるのは、ミリアの信用問題に関わった。

西の塔はこの魔法学校の中でも古い建物であり、気味の悪い建物である。

召喚術専攻の建物であるが、彼らはあるとあらゆる物から者を召喚する研究を行っている。

つまり、悪魔やら死霊やらも含めてだ。

ミリアはぶると震えた。あまりこういう系統は得意ではない。ただ、使い魔としてサランダー（火とかげ）がこんな状況にいてくれたら、ミリアの手はどんなに楽であっただろうか。使い魔一匹可愛いのがいたら、楽しいだろうなあ。

「あ、おはようございますー」

突然、温室の扉が開かれ、声を掛けられた。

ミリアは突然のことで驚き、とっさに振り向いた。

「レ、レペンス先生、お、おはようございますっ」

緑色のローブをはおった柔和な笑顔を浮かべる男性が立っていた。少し寝ぐせが立っている所がこの先生らしいところである。

アーノルド・トリフォーウム・レペンス4世。

植物学科の薬草概説などの授業を受け持つ若い講師の先生である。大学院生でもあるので年はまだ若いだろう。木の一族の子爵であるが、貴族と庶民を差別することなく公平な成績を付けてくれるので、ミリアのお気に入り先生でもある。

「今日は寒いねー。どう？ 今回のレポート難しかったかな」

毎回この温室で、ミリアに対して課題の難易度を確認するのだ。

この先生が自分の意見を授業に取り入れてくれていると思うだけで、ミリアはとても嬉しかった。

「そうですね。花菊と踊り子草の交配の問題が難しかったです。あと私は『鳳凰花の希少性』の課題を選択しましたが、2000文字では書ききれないくらい書いちゃいました。あの授業はとても楽しかったですよ」

「そうですね。鳳凰花はですねー」

ミリアはレペンスの横顔を見ながら作業を進めた。レペンスは鳳凰花について楽しそうに笑顔で語っている。

ミリアはこの時間が好きだった。レペンスは純粋に薬草が好きなんだとわかったからだ。

ミリアはレペンスのような友人が欲しかった。勉強、特に自分の

好きな物を愛し、優しい顔で語れる、語り合えるそんな存在。

自分の気持ちは恋なのか、どうかわからないが、レペンスは貴族である。

自分とは住む世界が違う、ミリアは知っていた。一生叶うはずのないことなんだと。

だからこの時間がミリアは好きだったし、レペンスの話だっけずっとずっと聞いていたかった。

彼はいずれどこらかの貴族のご息女と結婚して、幸せを得ていく。そんな彼をいつまでも祝福できるよう、まっさらな気持ちでいよう。

「この月光花はですねー」

ニコニコと話す横顔で、ミリアは笑みを浮かべて聞いていた。

ポーンポーン。

朝の起床を告げる大時計の鐘が鳴り響いた。

当然、温室にも鳴り響き、ミリアとレペンスの二人は手を止める。

「今日はここまでですね。いつも本当にありがとうございます。私一人では授業に必要なだけの月光花が用意できませんでした」

レペンスは瓶のふたを閉めながら言った。

「そうだ。お礼に」

「いえいえ、そんなの私はただ……」

ミリアはレペンスとはこれ以上の関係になりたくなかった。今の関係を壊したくない、というのが本音である。

何か生徒たちに見られて、被害をこうむるのレペンスの方なのだ。ミリアはレペンスの一人の生徒である、と自分に言い聞かせた。

「『新・薬草図会総目』要りませんか？」
「へ？」

「基本的な薬草を網羅した図鑑です。このタイプは20年ぶりで、張り切っちゃって二冊間違って買ったんですよ。図書館に寄贈しようかな、と思ったんですけど、すでにあって……、要りませんか？」

ミリアはおかしなことを期待した自分を、笑いたくなるような恥ずかしさがこみあげてきた。

レペンスは自分に対して、そのほどの感情は抱いていないのに、一体何を期待していたのだろう。

生徒たちが勘違い？ その前にミリアの勘違いである。
自意識過剰も甚だしい。身体が火照ってくる。

「……頂いてもいい、ですか？」

ミリアは赤くなった顔を伏せがちに答える。

「はい、勿論です。今日か明日、いつでもいいので暇の時に研究室

までとりに来て下さいねー」

そして、温室でレペンスと別れ、朝食を食べに向かった。

今日はなんだか嫌なこと起こりそうな気がして、自分のやるべき仕事が終わったら、さっさと寮に戻って寝ようと心に誓った。

。

「ミリアー、こっちこっち」

エリスが手を上げ、食堂の席を知らせる。食事はエリスがとってきてくれたようだ。緩やかなウェーブのかかった長い黒い髪を持つエリスは、大人びていてミリアの姉のように見えた。

温かなスープとパン、スクランブルエッグが乗っかっている。手がかじかむような場所にいたミリアにとっては、神様からの贈り物に見えた。

温かな橙色の照明のせいか、この食堂はとても温かな雰囲気である。木で作られた椅子や机で統一され、白い壁が映えていてとても素敵な食堂で、ミリアはとても好きだった。

ミリアはエリスの横に座り、先ほどのレペンスとのやり取りを話そうとすると、

「隣いいかな？」

ミリアとエリスが顔を上げると、いつもと変わらず髪を立てた不良風のシユラが不機嫌そうな顔で立っていた。

「あら、早いじゃん。今日」

パンとつてきちゃったよ、とエリスが袋に入ったパンを取り出した。

シュラは基本的に朝は起きない。高校生として一時限目から授業が入っているのに、その生活スタイルはどうかと思うが、ミリアが何度注意した所で直らなかつたので、ほっておいてあつた。

「なんかあつたの？」

ミリアが声を掛けると、エリスのパンを奪い、ミリアの横にずどんと腰かけ、「別に」と小さく答えるだけであつた。

「……変なの」

おかしい空気が四人掛けの机に流れ出したので、ミリアが明るく声を出す。

「そうだ。シュラ、一時限目何よ」

突然の問いに、シュラは目を大きく開けた。

「一時限目？ 知らん。忘れた」

「私知ってるよーだ、『基礎呪文学？』でしょ。一緒に出てあげよつか」

シュラはミリアのことを深紅の瞳で捉えた後、視線を窓の外へ反

らした。

エリスはクスリと笑う。

「呪文苦手なくせに」

「だからじゃない！」

ミリアはシュラの手を握る。

「こんなに早起きなシュラは珍しいから、私が一日あんたの授業に付き合ってあげんの。文句ある？」

エリスはこの会話をにやにやしなから聞いていた。

シュラがこれほど感情を表に出すのは、ミリアの前だけであり、その特別な感情に気付いていた。

ただ、ミリアはシュラは友達、幼なじみ、と言い張るのが、シュラにとってどれだけ不幸なことであるか、エリスはほろりと涙を流しそうになる。人の恋路ほど見ていて楽しいものはない、とエリスはいつも思うのだ。

食後、食堂前でそれぞれの寮に分かれて準備をする。

「じゃあ、中央城の506号ね。私も潜るからちゃんと来てよ！」

こんな食堂で大声で「潜るからねえー」と言われて、シュラは笑うしかなかった。現にミリアの隣のエリスも笑っている。

「……しょうがないから行ってやるよ。言いだしたからにはちゃん

と一日付き合えよ！」

シユラは頭をかきながら言った。

今日は嫌な気分だった。

胸がムカムカして、何かを燃やしたくなるような衝動に駆られて寝ている場合ではなかった。だから起きた。ただそれだけ。嬉しかった。

。

「ちゃんと来たね。感心感心」

シユラが『基礎呪文学？』の教室前に着いたら、既にミリアは仁王立ちで待っていた。

小柄な体躯に、焦げ茶色のショートヘア。今日は落ち葉は付いていない。日に当たれば小豆色になる瞳。色白なのに健康体そのもの。生傷の絶えない両膝、両肘。勉強の時だけかける赤淵の眼鏡。

ミリアはシユラの腕に抱きつき、教室の中に引っぱり込んでいく。ミリアの手はとても温かった。ただシユラがそう感じるだけかもしれないが。

「もっと早く来ないと良い席とられちゃうよ！」

「馬鹿、お前は潜りだろう！」

ミリアの動きは止まり、あっそうか、と笑う。

二人で言いあった結果、真ん中よりも後ろの席に座ることにした。ミリアはとても不服そうであったが、シュラがなんとか押し切った。

この中央城の教室はとても広い。ようするに実践練習に向いた教室である。

石作りで湿気のせいかとどこどころ緑色の苔が生えているように見えた。しかしまだ作りはしっかりしているようだ。

ミリアはこの教室に来たことがなかったので、とてもわくわくしていた。

魔法文字専攻の生徒は、書斎のような教室から書斎のような教室へと辞書と参考書を持ち歩く毎日とは違う、新たな体験だった。

「ねえ、基礎呪文だから、私にも出来るよね」
「しらん」

『基礎呪文？』は全専攻必修だったから、といちいちシラバスの説明をミリアは始めた。

ミリアは賢いうえ、真面目な生徒である。

だからといって、上手く魔法を使える訳ではない。シュラは静かに眼を閉じた。

教授である、アルマロス教授が教室に入ってきた。授業の開始である。

アルマロス教授は、白い髭を蓄えた優しそうな細身の老人のよう

に見えるが、この学校が誇る名教授である。

教授は様々な呪文を操り、世界で最も多くの術を使える魔法使いであった。

小さな丸眼鏡と、真紅のローブがとても似合う素敵なお先生である。

ミリアは目を輝かせながら教授の話を聞きいていた。

メモまでとっている始末で、周りにはメモをとる生徒は皆無である。シユラは頭を抱えながらその様子を見ていた。

「武装解除魔法から拘束魔法ね……。ねえ、シユラ。武装解除魔法は出来るの？ 教授はみんな出来るみたいない感じだけど」

できるんじゃないね、と軽く返事をした。すると、目を輝かせたミリアがこちらを見ている。

「あー、はいはい。今度ね、今度」

「うん、ぜったいだよ」

今日は拘束魔法か、実用的ね、と感心しているミリアを横目に見ると、こいつは幼い頃から全く変わらないと思う。

なんにでも興味を持ち、突っ走る。危なっかしくて、目が離せない。

だからちゃんと見てなくちゃいけないんだが。

「これから二人一組で実践だつて」

生徒が各々立ちあがると、教室中の机や椅子が生き物のように宙

に飛んでいってしまった。これで更に大きなスペースを確保することが出来る。

「私が居て良かったね」

とミリアは嫌味っぽく言う。

「一人が相手に向かって武装解除魔法を掛けて、武器を飛ばしたあと、拘束魔法ね」

さっきのメモを確認しながら、ミリアは言う。

しかし、武装解除魔法が使えないミリアは拘束魔法からである。

「じゃあ、撃つてみるよ」

シユラは手をふらふらせ、何も持っていないことをアピールしながら立っている。

ミリアは一息深呼吸をすると、呪文を唱え出す。

「心なき！ 身にもあわれを知られけり、君の立つ際の、君の今を！ 拘束魔法？（ファースト）」

すると、ミリアの手先からシュルシュルと白い煙が上がるだけであつた。シユラの身体に特に変化は感じられない、といった風に動き回る。

明らかに失敗である。

しかしミリアは諦めず、ミリアは恥ずかしそうにもう一度唱える。ただ結果は同じで、何度唱えても右手と顔と耳先がどんどん赤くなっただけであった。

シユラはそんなミリアを見て大笑いをしていた。

ミリアは諦めず何度もシユラを拘束魔法の虜にしようとするも全く上手くいかない。

「じゃあ、シユラが見本みせてよ！」

「さつき教授が見せてただらっ。ほら、周りにも成功者いるし見てみるよっ！」

ミリアが恥ずかしさを隠しながら、二人でギヤーギヤー言いあっていたら、アルマロス教授がゆっくりと近づいてきた。

それに気付いたシユラはどこか別の場所に行こうとしたが、ミリアは逆に近づき、教授にアドバイスを求めようとしていた。

「あの、馬鹿！」

「おほほ。どうだいできないのかい？」

優しい微笑みを暮れながら、教授はミリアに話しかけた。ミリアには現状の煙しか上がらない状況を説明した。

「それはそれはお嬢さん。武装解除魔法も出来ないのではないかい？」

「あはは、実は出来ないんです」

「ほほほ、要練習ですな」

「コツとがありますか？」

ほほほ、とアルマロス教授は髭をなぞり、教授の丸眼鏡がきらりと光った。

「お嬢さん、そなたもしや、」

「なんででしょう？」

ミリアが純粹なまなざしで、首をかしげた。

「ミリア！ ちょっと来い！」

突然、シュラに呼ばれてミリアは振り返る。

「あ、じゃあ失礼します」

ミリアは笑顔で軽く礼をして、アルマロス教授の傍を離れた。
しかし、アルマロスの青い眼は彼女を捉え、その先にいるシュラにも視線を移した。

と、その瞬間。

「ミリーー！ 伏せる！！」

シュラの怒号が飛んだと思ったら、ミリアの上で何かが激しく音が弾け、長年積もった教室の埃が辺りに充滿した。

ミリアは咄嗟に伏せた身体を上げようとすると、自分の回りに釘

の沢山刺さった、こん棒とナイフが無数に転がっていることが確認できた。

「大丈夫か、怪我は無いか」

シュラがミリアの元に誰よりも素早く駆けより、怪我がないか確認する。

後からアルマロス教授も近づいてきて、彼女に覗きこむ。すると、おずおずと二人の男子生徒が寄ってきた。

どうやら武装解除魔法を掛けたら、宙に浮いた武器が暴走し、縦横無尽に飛びまわってしまったということだった。そして、暴走した武器がミリアを襲ったのだという。

その説明にミリアは納得し、笑顔で許したが、シュラはギロリと二人の生徒を睨みつけた。元来の強面ということもあり、二人はもの凄く怖気づいているのがミリアには感じられ、シュラの鼻をつかんだ。

「いつてーな！」

「いつまで睨んでんのよ！ 私が許してんの」

二人でまたギャーギャー言っていたら、アルマロス教授がゆっくりと口を開いた。

「これは、魔法の強制無効ですね、ほほほ」

ミリアは首をかしげたが、シュラは無言で視線を反らした。
アルマロス教授のまなざしはとても優しく、温かい。

「まだ教えていない高度の魔法の無詠唱発動ですな。このような素晴らしい生徒さんがおられてびっくりしました」

ミリアはシュラと教授の顔を交互に見てから、彼女の顔がパーと明るくなり、

「教授、シュラは私なんかより凄く優秀な生徒なんです。ただ授業に出席するのが苦手で……」

「うるせー、行くぞ」

ミリアを無理やり引っ張り、教室から出ようとした。
ボーン、ちょうどと一時限目の終了を告げる鐘が鳴る。

「ほほほ、良い方ですな」

シュラが一瞬アルマロス教授の方を向いた。

「お嬢さん、いつでも授業に遊びにいらっしやい」

「はい、また来ます！」

ミリアはシュラに引っ張られながら笑顔で手を振ると、教授も手を振って返してくれた。

「……どんな訳があつたかわかりませぬが、楽しくなりそうですな
ー、ほほほ」

アルマロスは二人の姿を見つめながら、自らの髭を撫でていた。

(2)

シュラが無理やりミリアを引っ張りだし、人気のない階段のバルコニーに連れてきた。

赤い絨毯がひかれた大理石造りの立派な階段。6階から7階へと続く、滅多に人が通ることのない場所。

「アルマロス教授、優しい人だったねー。私、教授の授業取りたいな。シュラももっと——」

「ミリア」

「そうだ、シュラがさっき使った魔法の強制無効の無詠唱ってどういう——」

「ミリアー!!」

シュラがいつになく真剣にミリアの名前を呼ぶ。その真剣さにミリアは圧倒されてしまい、後退りし壁にもたれかかってしまった。

「何、かな……?」

雰囲気が違うシュラに戸惑いつつも、ミリアは今作れる精一杯の笑顔を作った。

朝からシュラの様子がおかしいとは思っていたミリアだが、ここまでイライラしているシュラは見たことがなかった。

風貌が風貌だけに、余り荒れると回りに迷惑かかっちゃうな、と
心で思う。

意を決したように、シユラは真剣なまなざしで口を開く。

「……ここ、学校を、やめよう」

シユラをの口から紡がれる信じられない言葉。

「一緒に……」

突然の言葉にミリアは動けなくなかった。
頭がよく働かなくなった。

シユラは突然なにを言っているんだろう。
口走っているんだろう。

ミリアには到底理解が出来ない言葉が並んでいた。

「……でよ。シユラどうしちゃたの？ 今日なんか変だよ？」

ミリアは動揺しながらも、優しくシユラに笑いかける。

「お前をここにおいておきたくない。だから——」

「なんで、なんでやめなくちゃいけないの！？ 私はまだまだ学び
たいし、シユラだって——」

ミリアの夢は、魔法省の敏腕書記官になることだ。ここの高等部を出て、進学すればそれなりに優遇されると聞いた。

夢の為に今まで頑張ってきたのに、シュラが一番分かっていることだと思っただのに。シュラが一番自分のことを理解してくれていると思っていたのに。

ミリアの脳内が揺れる。おかしい、おかしいよ、そんなの。

ミリアが心の中で叫ぶ。声にならない否定の声。

「ミリアがやめるなら、俺もやめる。一緒に故郷へ帰ろう」

ミリアは首を横に振り続けた。

その反応にシュラは睨みを増しながら、ぬらりぬらり近づく。

彼の雰囲気突き刺さるように鋭く、痛い。

「……じゃあ、契約を更改しろ。俺は契約以上のことを行いすぎている」

シュラの深紅の瞳がミリアを睨む。鼻と鼻が触れ合いそうなほど、顔が近づく。

シュラの吐息が舐めるように肌をなでる。

「け、契約って……なに？ わかんないよ、シュラ……」

シュラが目を閉じる。眉間を皺をよせ、明らかに不満顔だ。そして大きなため息をつく。

「……俺はお前が傷付くところはみたくない。ここは危険が多すぎる——」

またこんな切ない声を出すシュラ。

この声を聞くとミリアの身体の奥が冷たくなり、切なく引きしめられるのだ。

「そんなのシュラの勝手じゃん！

私は自分でこの学校に来ることを決めた。あんな街に引きこもっていたって、何も変わらない！

何も良くならないことぐらいシュラも分かっていると思ってた。

私は変わりたいの、もっと知りたいの、もっともつと自分に挑戦したいの！ だから……」

「さつきは死ぬところだったんだぞ！」

シュラが感情をぶつけてくる。シュラがとてもミリアのことを心配していて、とても大切に思っていることはミリアにも伝わった。

それはわかった。その気持ちはとてもありがたいものだともミリアは思った。

「でも、私は限られた人生を、私の意志で生きたい」

シュラの厚い胸板を押し分け、ミリアは彼の腕の中から抜け出し

た。

多分、ミリアはボロボロ泣いていることがわかった。
シユラは今までの人生の中で、一番ミリアの近い所で彼女を支えてきてくれた。

辛い時も悲しい時も、彼が話を聞いてくれていた。
一番、ミリアを理解している、家族よりも、誰よりも理解してくれている、そう思っていた。

だから、つらかった。

この学校に入るためにどれだけミリアが苦労したか、彼は見ていたはずだ。

この学校に入ってからどれだけミリアが涙を流してきたか、彼は見ていたはずだ。

それが全てミリアの夢に繋がっていたから。
それが、夢が否定されることが一番つらかった。

ミリアは誰かに涙を見られるのが嫌だった。
シユラはいつも見つけに来たが、彼以外に見られるのは嫌だった。

ミリアは人を避けて、大泣きできる場所に誘いこまれた。

西の塔だった。

○

メシッ。

一人を残して誰もいなくなったバルコニーの壁にに穴が空く。周りには亀裂が走り、ぱらぱらと破片が降ってきた。

シュラは何がしたかったのか、自分でもよく分かっていない。

ミリアを泣かせるつもりなど毛頭に無かった。

もっと上手く誘導させて、同意の返事を貰うはずだったのだが。

朝からイライラしていて、契約の話など持ちだしてしまった自分にシュラは恥じた。

「ほほほ、お熱いことすな」

「貴様、なんのようだ」

先ほどの時間のアルマロスが静かなまなざしで階段に座っていた。

「本性が見えかけてますよ、シュラ君」

「それがなんだ」

上段に座るアルマロスにシュラは睨みつける。シュラの身体から黒煙がうつすらと上がり、瞳も不気味瞬く。

大きな窓から取り込む陽光により、彼の背中が照らされていた。

「我がアガスティア魔法学校は試験にさえ合格していただければどなたでも入学して頂けます。

ただし、人ならざる者の場合は、前もって届け出が欲しかったです
ね」

「ふん、くだらん」

シユラは吐き捨てるように言った。

「ところで、何年になるのですか？」

教授はシユラに温かな言葉をかけ続ける。

「今は2年だ」

「ほほほ、私も含め教職員の誰もが気付かなかったことが情けなくな
りますな。

いやいや、彼女との契約でございます」

「……13年程度になるか」

「長い関係ですな、ほっほ、彼女は優しく真面目で聡明な方と聞
きました。それにとっても天真爛漫で可愛らしい」

「何がいいいい」

「彼女はいずれ貴方の力の及ばない所に好き勝手に飛んで行きそうですね、ほほほ。現に今も手を焼いている」

「貴様……」

シユラは今にも殴りかかりそうな勢いで、アルマロスに近付いた。

「ほっほ。まだまだアガスティーアの生徒を続けるのであれば、私を敬って頂きませんか、では」

と言が残すと、シユラに襟首を掴まれる前にアルマロスはふっと姿を消した。

メシッ！

猛った怒りの行き先がなくなったため、壁にもう一つ大きな壁が空いた。

○

「シユラのばあかあ……」

西の塔の地下2号室。ミリアは顔をぐちゃぐちゃにしながら魔法陣を描いていた。

指定された魔法陣は一つだけ。床一杯に描こうとしていた。

木製の床に白チョークで、異界との扉を描いていく。

案外早く描き終わってしまい、ミリアは手持無沙汰になってしまった。

このまま寮に帰ってもいいが、こんな赤い顔で眼を腫らせてまま出歩きたくなかった。

というよりも、シユラに会いたくなかった。

ミリアは地下2号室に無造作に置かれていたソファーに飛び込む。

「かびくさい」

ミリアは笑った。

この教室は初めてではなかったが、いつでも不思議な雰囲気のある部屋だと思っていた。

天井からはシャンデリアがぶら下がり、真鍮とガラス作りの本棚、ソファー、チェストなどの家具が無造作に置かれ、召喚術の本も山積みになっ

ている。召喚術に必要な水晶や鉱物、なども並べられていた。

ミリアはかびくさいソファーに寝ころびながら、手に届く範囲にあった本を手取る。

『はじめよう！ 召喚術1ねんせい』と表紙に書かれた教科書のようだった。

ミリアは無造作にパラパラとめくっていくと、ふと手を止めた。

『やってみよう。サラマンダーの召喚』

ミリアは今朝も思っていたのだが、使い魔の一匹や二匹欲しかった。

特にサラマンダーなどは温かいと聞くと、自分の血族の属性とも合致している。

こうやって誰かと喧嘩した時も静かに話を聞いてくれるかもしれない。

軽い興味もあった。

「よし」

とミリアは頬を叩き、自分に気合を入れると、ページを折り曲げ、その通りに魔法陣を描き始めた。

円の大きさは、人間が水平に両手を伸ばした長さが直径に最適、と書かれていたので、その大きさを描いていく。

どんなサラマンダーが現れるんだろうか。

魔法生物学で実物を見たことあるが、個体差があって面白かった。魔法文字専攻が第一志望だったが、魔法生物学科でも良いと思っていた時期もあるくらいミリアは動物が好きである。

今までペットというものを飼ったことがなかったが、責任をもって最期まで飼うことが大切だと知っている。

ミリアは魔法陣を書ききると、顔をあげた。

そして、教科書の本文を見る。

＜召喚獣は、召喚者と契約を結びます。そしてその契約が持続する限り召喚獣は召喚者に従います。＞

＜契約とは……召喚獣と召喚者との間に結ばれる約束事。＞

「しかし契約には”対価”^{たいか}が必要なので事前によく交渉、確認しましょう！」>

「対価なんて何をあげればいいんだろ。契約か、シユラも確かこんなこと言ってたっけ……」

しかし、今のミリアはシユラのことは考えなくなかったので、思考を止めた。

今はサラマンダーを召喚することに集中しよう。

ミリアは魔法陣に魔力を注ぎ込む。

「紅の！^{くれない} 二尺伸びたる蛇の尾の 火やわらかに 春雨の降る！
来い、火蛇・サラマンダー！」

突然の爆発音と共に茶色の煙が上がる。消えていたはずのあらゆる燭台から火柱が上がり、周りが黄色く明るくなる。

ミリアは爆風で立っておられず、腰が抜けてしまった。

焦げくさい臭いとともに、パチパチという火が燃える音が聞こえる。

「サラ……まんだあー？」

煙の奥から、魔法陣の中から何かが歩み出てくる。
褐色の素足に金のアクセサリーが見えた。

違う、魔法生物学で習ったサラマンダーじゃない……。こんな立派な足を持っているはずがない。

「サラマンダーじゃないの……？」

ミリアの声に対して、不機嫌そうなため息が漏れる。

「なんで、いつつもサラマンダー、サラマンダーってさ……。畜生」
響く、低い声。なんだろう、ミリアの身体が震える。

と、彼は持っていた剣で、煙を一閃薙ぎ払い、晴らしてしまった。
瞬時に収まってゆく硝煙。

その煙の奥にいた者。

彼は赤い髪に深紅の瞳を輝かせ、炎の衣をまとった青年が立っていた。

彫刻のように美しい整った肉体に、爽やかな整った顔がそこにある。

ただ人間には無い、黒く硬そうな角が耳の上に見えた。
髪の手先、衣の手先は炎となりゆらゆらと揺らめく。

そして魔法陣から一歩進み出て、ミリアに近付き、腰を下ろして
跪いた。

ジャラリと彼の身に付ける貴金属から音が響く。
炎より出た、武人といったところだろうか。

「我が名はアスラ。炎の眷属序列第4位、魔神・明王アスラ。主命
に答えんがために——」

魔神？ 明王？ 第四位って上から四番目？

ミリアの頭の中が混乱する。ミリアはただサランダーを、初心者初めの一步としてサランダーを召喚しようと思っただけだった。

このような見るからに大物、彼女の手には負えるものではない。

彼の放つ熱気にミリアは後退りする。

これは圧倒的魔力差に身体が反応しているのだ。

危険だと。近づいてはならない、と。

「ちがう。ちがうの、私……」

「ミリアはサランダーを呼び出すつもりだったらしいが、そうはさせないからな」

アスラは腰の抜けたミリアに対して意地悪そうに笑う。

この笑い方をミリアは知っている。

「ミリアの魔力は心地良い。あの（サランダー）のような低級使い魔にはもつたない。ミリアの”魔”は一生私の物だ」

アスラはミリアの右手を取り、手の甲に口を落とす。

彼の指先は炎と一体化しているように見えていたが、やけどすることはない。

温かい何かが全身に走る。

「もうすでに契約は交わされているが、何か用かミリア？」

「契約……？」

「そうだ。私とミリアとの間には契約がある。だから心のままに命ずればよい」

アスラの褐色の身体には赤い深紅の稲妻のような紋様が走り、炎のように燃えている。やはり、炎の眷属なんだと思った。

彼のまわりは熱い。ミリアの額から汗がこぼれる。彼の雰囲気には飲まれている。圧倒されているのだ。

「憎いヤツも殺してもやるし、世界もお前が望むなら、粉々に碎いてやる」

落ち着いた声で恐ろしく冷たい言葉を発する。

「そんな……」

駄目だ、と言おうとした瞬間。

ミリアの視界が歪む。アスラが、外界が霞んでいき、身体に力が入らなくなった。

息が、呼吸が上手くできない。彼の熱気に当てられ過ぎたのだから。

こんな凶悪な悪魔を、このまま放っておくことは危険だとわかる。分かっていたけど、身体が言うことを聞かず、教室の床に倒れ込む。

そして、ミリアは意識を遠くへ手放した。

。

「あなたは、だあれ？ サラマンドー男さん？」

手を伸ばす。

そのさきに褐色の男が胡坐あぐらをかいて座っていた。

「……アスラだ。クソガキ」

投げやりな返事でも少女は嬉しかった。会話が出来た。おしゃべりしてくれた。

お友達になれるかな。

なれるよ、はじめての、友達に。

「あしゅら？」

「アスラだ」

少女はアスラの大きな背中に飛び付く。

あったかそうだったから。大きくて、まるでお父さんの背中みたいで。

懐かしくて、温かい。あったかい。

「あったかいね」

「……契約を」

「けーやく？」

「俺にしてほしいことを言え」

(3)

あったかい。

身体の奥に温かみが流れ込む。ああ、心地よい。ずっとこうやって優しく、温かみに抱かれていたい。

口から身体へ。口を通して身体へ――。

口？

ミリアは口に違和感を覚えて覚醒する。

身体を飛び起こすと、西の塔地下2号室だった。変わらない、いつもの――。

カビ臭い、湿気の多い、いつも地下室だ。

召喚術の魔法陣を描いていて、サラマンダーを呼び出そうとして、ミリアは必死に頭を回転させ、どのような状況に陥っていたのか理解させようとした。

「ミリア」

聞き覚えのある声を掛けられ、ミリアはそちらを向く。

シユラが不機嫌そうにソファ―に腰かけていた。ミリアの足元。

また、いる。

どんなにミリアが逃げ出しても、シュラはいつだってミリアのことを見つけた。

不思議なくらい、シュラはミリアを追いかけてくる。

「まさか、あんた……」

ミリアはどうやらソファーに寝かされていたらしい。ミリアは思わず口を拭う。

想像できることは一つしかない。

「ま、ま、まさか、きき、キスした、でしょ……？」

ミリアは顔を赤くして、シュラに問う。純粋なミリアにとって、キスはとても神聖なものであり、恋人同士が行う行為だと思っていた。

勿論はじめてだったし、心に決めた人としかしない、と固く誓ったはずだった、のに。

火照った頭では考えがまとまらなくて、上手く口が回らないミリアに、シュラはいつも変わらない風に、静かに彼女の言葉を待っていた。

「ああ、そっちの方が魔力の受け渡しにはいいと思って。ミリアは魔力が尽きて気を失ったから」

「だからって、私とあんたは——」

ミリアは言葉を失う。なぜ彼がここにいる。
幼なじみ？

いつも見つけられた？

いや違う。でも、言いたくない。言ったら今までの全てが終わってしまふ。

崩れてしまふ気がして。

ミリアは思わず目を伏せ、言葉を紡ぎあぐねる。

「言っちゃうのが、怖い？」

シユラは笑う。ミリアは顔をあげ、シユラを見た。

その笑みはさっきのあいつ（アスラ）に似ていて、ミリアの予想は確信へと変わる。

シユラの深紅の瞳がゆらりと揺らめいたように感じられた。

「普通さ、使い魔を召喚したあと気を失うか？ わっるーい悪魔ならお前を喰って、絶対逃げ出すぜ？」

シユラは身体を起こそうとするミリアに対して、抑えつけるように彼女の身体をなぞる。

彼の手は温かい。ずっと温かったのは、彼が炎の眷属だったからなのだろうか。

「でも、シユラはしなかった」

ミリアの声にシユラは大きく眼を見張る。

「なんで、どうして……？」

ミリアは消えそうな声で、シュラに尋ねる。

シュラはアスラだったかもしれない。だけどシュラはシュラだ。

強面だが、心優しいことをミリアは知っている。

人づき合いが下手だけど、ミリアには優しい温かな笑顔をくれた。

シュラはゆっくりと言葉を紡ぐ。ミリアに言い聞かせるように。まるであやすかのように。

「俺とお前は、”お友達”だからだ。どちらかが死ぬまで」

そのような契約だ、とシュラはため息をつく。

”お友達”

少しその言葉に驚く。シュラはよくふざけて言っていた。

お友達だからな、お友達として、と言いつつがましく笑っていた情景が頭に甦る。

その単語に口に出して、ミリアに気付いてほしかったのかもしれない。

申し訳なさをミリアは感じた。

「それが私との契約？」

「そ」

「いつから？」

その言葉にシュラはムスツとした顔で睨みつける。彼の眉間にしわがよった。

「ずっと。13年」

幼いミリアが縛った小さな約束。
それが13年間もこの使い魔をミリアの横に縛ったのだ。

ミリアは自分が犯した過ちの重さに沈んでゆく。

幼さゆえに純粹で恐ろしい。

その事実を忘れてのうのと生きているミリアの姿を見て、シュラどれほど屈辱的であっただろうか。

ミリアの横で彼はどのようなことを思っていたのだろう。

殺したくなるほど苦しい夜はなかったのだろうか。
消えなくなるほど悔しい日はなかったのだろうか。

「……ごめん、気付かなくて。」

契約以上のことやらせちゃったから頭にきたんだよね。

私が調子に乗ってて無理やり振り回したり、魔法を使わせたりして……。だから」

ミリアは、唾を飲み込む。

次の言葉を発しようとした瞬間。

「契約の破棄はさせねえよ。俺がさせない」

ミリア吐き出そうとした言葉を思わず飲みこむ。

「なんでよ……。私は……」

「お前の魔力のような純度の高い物は中々ない。桁違いに強力で熱い意志を感じる魔力、芳醇で香ばしく、透き通って甘い。それに香りも好みだ」

シユラは突然ミリアに覆いかぶさる。彼女の顎をあげ、額に額を付ける。

そして味わうかのように、眼を閉じ大きく息を吸う。

そして、満足そうに微笑みを浮かべるシユラはいつだった夕日のように穏やかだった。

日常的にシユラが行うこの行為。

「私魔力は……」

ミリアは入学当時の健康診断を思い出す。

魔力測定や潜在魔法量の数値結果は眼を背けなくなるようなものだった。

そこには、魔法使い・魔女として不適格、という烙印を押されているようなものだったから。

「俺が契約の対価として喰ってるから、レベルCだったんだろっ」

だからシユラは笑っていたんだ、とミリアは思う。

自分に対して特別な何かがあるとは思っていなかったが、正式な形で数値で表されると流石にへこんだ。

悔しかったし、悲しかった。

あの夜は泣き明かした。ミリアは今でも覚えていた

「俺は絶対返さねえし、これからも頂くつもりだ」

シユラは口角あげてニヤリと笑う。深紅の瞳が冷たくミリアを見下ろしていた。

ミリアはシユラの向こうにある、古ぼけた天井を見ていた。理由が分かってくると、これほど虚しいものはない。

幼なじみだと思っていた男は、ただの使い魔だった。ただミリアが命令して、友達になった、偽りしかない関係。

形だけの、”お友達”。

なのに、ミリアはシユラの進級や単位の心配して。

シユラとの関係が噂として広まらないように腐心して。

シユラはミリアの作り出した、自己満足に過ぎないのではないだろうか。

所詮”お友達”ごっこ。張りぼて。

胸の古い心の傷が痛む。昔からこんなだったけ、と。

「だから、死んで欲しくないんでしょ、私の魔力が欲しいから」

ミリアは涙が溢れてきた。

シユラは自分の心配などしていなかった。

自分の魔力を心配していたんだ、と知ってしまったから。

シュラはずっとシュラだった。

しかし、ミリアはシュラに裏切られてしまった気分だ。

だから学校をやめて欲しかったんだ。

危険があるから。死なれたら困るから。体の良い食料がなくなるから

「こうやって寄ってくるのも、全部全部！」

否定して欲しかった。

否定を期待していた。

違う、と。いつもの笑顔で優しく抱いて欲しかった。
そんな希望を抱いていた。

「ああ、ただの暇つぶしだ」

「馬鹿！」

乾いた音が響いた。ミリアはシュラの頬を叩き、その瞬間彼を蹴飛ばす。

彼は猫のように軽やかに飛び退き、頬に手を当てていた。

「もう知らない。もう大っ嫌い！」

ミリアは涙声で教室中に埃をかぶった物々を、顔真っ赤にして、顔をくしゃくしゃにしながら投げ、投げるものがなくなると部屋か

ら飛び出して

いった。

バタン！と乱暴に扉が閉められ、シユラは苦笑いを浮かべる。

その後、彼が両手を鳴らすと、投げられてぐちゃぐちゃに散乱した召喚術の教材がスーッと元の位置に戻っていった。
むしろ以前より綺麗に整えられた。

シユラは床に現れたミリアに描かれた魔法陣に眼を落とし、その陣に触れる。

素晴らしい出来だった。いつ見ても。

几帳面に並ぶ文字。滲み出る心地良い魔力。

シユラはため息一つすると、霧のように姿を消した。

。

「レペンス先生、先生！」

東の塔の2階レペンスの研究室の扉が乱暴に叩かれる。

「どうかしたんですか？」

レペンスが扉を開けると、黒いローブを着た生徒が2人立ってい

た。襟元を見ると召喚術専攻高等部の3年生だということがわかった。

彼らの表情は青ざめ、余り良い雰囲気はしなかったので、レペンは素早く彼らを室内に招き入れた。

室内には所狭しと植物が並べられ、天井からも垂れ下がっている。

彼らの一人は口を開くなり、

「枯葉剤を下さい！ 思いつきり強力な」と叫んだ。

「まず訳を話してください。あなたたちは召喚術専攻の生徒ですよ？」

彼らは頷き、出された水を飲みこむ。

「僕らは4人で……、その、競争したんです。どれだけ強力な魔を召喚できるか、と」

レペンはそれだけ聞くとことの大体の経緯が理解できた。各専攻で起こる事故・事件は大抵似たようなものが多い。

「なるほど、そのうちの一人が契約を結ぶ前に強大な魔力に当てられて、気を失い、召喚された使い魔が暴走していると」

二人は同時にうなずいた。

「では、召喚術専攻の主任教授ストラス先生と、対魔法具術のメルキセデク先生に至急知らせてきて下さい。場所はどこです？」

「西の塔地下2階の一番奥の空き教室……」

「わかりました」

レペンスがほほ笑むと、右手を鳴らした。

「どうです？ 落ち着きましたか。月咲竹の花粉も混ぜたので、少しは早く歩けると思います。よろしく願いしますね。私は先に現場に行つてま

すから」

というと、レペンスは部屋を出た。

彼は生徒たちに水を差しだす際、沈静効果のある眠り草の乾燥粉末を混ぜておいた。こうすることで、少しは落ち着きを取り戻せると考えたからだ。

レペンスは召喚術専攻の生徒が自分の部屋に来た理由を考えていた。

本来なら主任教授であるストラスに知らせるのが普通である。しかし彼らは停学や退学を恐れて自分の所に来た。

ということは、召喚したのは、木属性の使い魔である。

タンタンタンと階段を下り、中央城の大廊下を通過する。

授業中であるが、まばらにいる生徒にアルマロスに声を掛けてくれるように頼んだ。

人数が多い方がそれだけ良いと考えたからだ。

マンドラゴラ、ピリー・ウィギン、ドリュアド、キジムナー……。これぐらいの低級から中級なら力でゴリ押すことができるが、それ以上は一人では厳しい。

しかもレペンスは薬草学の専門であって、悪魔祓いはあまり得意とは言えなかった。

「上手くいけば良いが……」

大きな窓から見える西の塔を見る。そこには黄土色の石造りの塔が空へと伸びていた。

(4) (前書き)

大切な戦闘シーンでへたっています；
イマジネーションで補ってやって下さい。

(4)

西の塔地下二階の女子トイレの鏡の前。

薄暗く、滅多に誰も使わないトイレには個室が2つ並んでいる。
また涙で顔を崩してしまったミリアは顔を洗っていた。

「まだ手が震えてる……」

考えれば考えるほどシユラの顔が浮かんできて、ぶるぶると首を振る。

顔にピシャと冷たい水を掛ける。

夢なら覚めて欲しい。
全部夢ならいいのに。

と、水を払いミリアが顔を上げると、背後にシユラが立っていた。

「うわあ——」

と大絶叫しようとした瞬間、シユラの大きな手で鼻と口を塞がれる。

そしてなされるがままに、個室の奥に供えられている掃除用具入れ連れ込まれた。

「ちょっと黙ってる。あと俺がいいというまで息を吸うな」

早口にシユラはそういうと、ミリアを塞いでいる手とは違う方の手に小さな炎を灯し宙へ放つ。そしてその炎は消えて行った。

ミリアはもごもご何かを言おうとしていると、突然天井の電灯が消される。

突然のことにミリアは驚き、戸惑っていると、床や壁を何かが這う音が近付いてくる音が聞こえてきたのだ。

出しっぱなしのはずの洗面台の水がキュルキュルと蛇口が閉められ、止まる。

ぴちゅん、と水滴が垂れる音が響く。

この空気は誰がいる。

ミリアは震えた。しかも息苦しくもなってきた。

苦しいことをシユラに目で訴えようと、この掃除用具入れは狭すぎて身動きが取れない。

床を這う音もどんどん近付いてきて、一番入口に近い個室からは水が流された音が響く。

そして、次は掃除用具入れの隣の個室から何かを探すように這いまわる音が、ミリアの耳に聞こえる。

何者かも想像できない。ただ人ではないことは確かだろう。しかしミリアは限界に近かった。

「うつぷ……」

ついに我慢できなくミリアは思わず息を吐き出した。すると先ほどまで散漫な様子だった這う音が止まり、明らかにここにの前に集まり始める。

「ばれたか」

シュラは扉に手をかけ、開けた瞬間、トイレの床タイルから噴き出すように火柱が上がる。

シュラはミリアの手を引き飛び出すと、そこは世界が変わっていた。

火柱により薄暗かったトイレが黄色く明るくなり、なにより、木の根が床やタイルを覆い尽くしていたからだ。

それを燃やされ、熱がるかのように木の根がしなっている。

「なに、これ……？」

「マン・イーティング・ツリー。大型の食人木。木属性の中級悪魔だな」

「え、食人って、人を食べる……」

「普通は」

シュラが手を引っ張り、ミリアを外へと連れ出す。

「なんでこんな」

「どこかの誰かさんが、己の実力に見合わないものを召喚して、その魔力に当てられて気絶し、契約もしないうちに暴走って感じた」

「……あの」

「ミリアはちゃんと契約できている、安心しろ」

トイレの外に出てみると、そこもミリアの知る地下2階ではなかった。

壁や床は木の根や蔓が覆い尽くし、足の踏み場すらない。

飛び越えて走るのは難しく、ミリアが転びそうになる度、シュラにひっぱってもらいなんとか走れている状態だった。

踏みつける蔓の中には、柔らかく生温かいものがあり、踏みつけ

るたび液体が飛び散る。

なんだか気持ちが悪くなるような臭いも充満していた。

ミリアは思わず口と鼻を塞ぐ。

「もうこの階は危険だ。早く上へ」

シュラが手を強く引き、下級魔法で階段を覆っていた蔦^{つた}を焼き払う。

ミリアが歩きやすいように道を作り上げ、さらに追ってくる蔓も殴り飛ばしていた。

「助けてくれてありがとう」

「……ああ」

ミリアが上の階へ避難しよとした時、「助けて」とか細い声が更に奥の、根や蔓が密生している方から聞こえてきた。

その声にミリアの動きが止まる。

この食人木を召喚した人物は一体どうしたのだろうか。

まだ生きていたら、この階にまだ生きている人がいたら――。

ミリアはシュラに呼び掛ける。

「あ、あのさ」

「いやだ」

ミリアの考えを予想したシュラが間髪も入れず否定する。

「お前は早く逃げろ、蔓に掴まれて食べられる。駆けつけてくる教

授たちに任せればいい」

シユラはミリアの背中を押し上げる。

でもまだ生きていたら。教授たちが来る前に死んでしまったら――
|。

「ごめん、助けてくる！」

シユラの身体をすり抜け、ミリアは地下二階の更に臭気の濃い方へと走っていく。

追われていた蔓の対処をしていたシユラは対応に遅れ、彼女を逃がしてしまった。

「あ、くそ！ この真面目女め」

シユラは眉間に力を寄せ、背中越しに彼女の背を睨む。

そして舌打ちをすると、先ほどまでとは比べ物にならないぐらいの火球を蔓に放ち、彼女を追った。

ペリペリと階段周辺は黒焦げとなり、蔓が焼け落ちる。

。

「耐・魔気」

ミリアは制服のスカートのポケットに入れていた護符を取り出し、魔力を込める。

青く光始めた護符を胸に貼った。護身用に使っておいた汎用性の高い護符である。

シユラから離れると、とても臭気が濃くなり、気味の悪いねつとりとする魔力が彼女の集中力を下げていた。

まるで熱帯のジャングルのような湿度の高さ。

それに加え、明かりも消され真っ暗だ。ミリアの額から汗が流れる。

「対魔・止！ 対魔・止！」

襲い来る根や、蔓は攻撃用の護符でなんとか撃退できた。

ただ飛び散る樹液はネバネバしており、臭いも生臭く心地よいものでは決していない。

「誰かいますかー、いませんかー」

ミリアは叫ぶ。声は奥にいく度大きくなる。

おそらく一番奥の空き部屋だろう、とミリアは直観した。

なぜなら目の届きにくいこの場所は、以前より不良学生の溜まり場として、生徒の中では有名である。

その為、今期よりこの地下2階で授業が開始されるようになったのだと聞いた。

木の根が張り出し、扉が閉まらなくなった一番奥の地下5号室の前に立つ。

中は真っ暗で伺いしることは出来ない。

出来れば火の一つを投げ込みたいところであるが、予備の符が無くなってしまった。

「耐・魔気！」

彼女が最後の一枚の護符に魔力を注ぎ込み、護符の文字が青白く光る。

そして、その一枚を室内に向かって投げ込んだ。

室内に一点だけ青く光り、人が倒れている足が見えた。

ミリアは思わず急いで室内に飛び込み、倒れている人に駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

ミリアが駆け寄った人は荒い呼吸をしていたが息はある。ミリアはその人を起こそうとすると、彼はミリアの後ろを震えながら指差した。

ミリアが振り向いた瞬間、今までとは違う、太くて巨大な蔓に薙ぎ飛ばされたのだ。

教室の壁に叩きつけられ、ミリアの背中に激痛が走る。

口を切ったようで、口の中に血の味で溢れる。

どうやら彼は餌だったことに、ミリアは気付いた。

あんな教室の中心にいるはずもない、くやしさに唇をかむ。

しゅるしゅる、と根の這う音が迫り、手足の自由が奪われそうなる。

その前に、と彼女は額より汗と血が混ざったものを人差し指にのせ、床に文字を書いた。

「転・送出……」

ミリアが顔を上げると、青く光る護符の回りには足が見えなくなっていた。

「ふふふ……、顔さえわかれば転送は出来るけど、一人しか無理なんだよね……」

血で書いた文字が赤く光り、消える。

おそらく上級魔導師なら何人もぽんぽん転送できるかもしれないが、ミリアにはできなかった。

自分の精一杯に満足し、ミリアは目を閉じる。

両手、両足に冷たかったり、生温かったりするものが這う。しかし、彼女は動けなかった。

抵抗する魔力すら残っていなかったのだ。

遠ざかる意識、眠気のような何かに彼女は襲われる。

このまま目を閉じたら自分は死んでしまっただろう、しかし彼女の身体には力が入らなかった。

魔法省の敏腕書記官になりたかった、それだけが心残りか、とミリアは笑う。

そう思うと、「学校をやめよう」と言ったシュラの辛そうな顔が思い出された。

シュラの言うことをもつと聞いてあげればよかったのかな。
もっとシュラが笑ってられるようにしてあげればよかったのかな。
もっと、もっと……。

「シュラ、ごめん。友達終わりだわ」

ミリアは消えそうな声で泣いていた。

。

「ミリア！　しっかりしろ！　くそ！」

シュラがミリアの微かな魔力を辿り飛び込むと、彼女は幾多の蔓に巻きつかれ動かない状態だった。

シュラが見上げるほど大きな食人木に今にも取り込まれようとしている。

シュラが汚い緑色をした蔓から、必死にミリアを引き剥がそうと
していた。

ミリアは気を失っているだけだ、まだ死んではない。

取り込まれそうなミリアを助け出そうとする度、太い蔓が飛んできて、シュラを払い飛ばす。

彼は叩きつけられたり、反対側の壁まで飛ばされたりもしたが、ミリアを絡め取る根を素早く取り除いていく。

「いつだって、突っ走って、こけて泣いて、迷惑ばかりかけやがって。ホント世話の焼けるやつ」

日頃から積もった不満。

でも口調は不思議ととても優しくなる。

いやじゃなかったから。

「……シユラ、早く逃げて」

うわ言のように呟くミリアを抱きしめ、シユラはミリアを拘束から救出する。

蔓に囚われていても他人の心配ばかりする彼女には、笑いしか出てこない。

しかも、人間ではない自分にだ。

シユラは身軽に後ろに飛び、優しく抱きながら彼女の額と自分の額を合わせた。

そして、青くなった彼女の唇に自分の唇を重ねた。

自分の魔力を彼女へ。

冷たくなったミリアの手を握り、身体全体で彼女に魔力を送る。

目を覚ませ、と願いながら。

食人木のせいで酷い臭いを纏っていたが、彼女は甘い。

「お前を置いていくなんて出来ない。俺はお前の友達だから」

微かに目を開けたミリアに笑いかける。

巨大な蔓が襲いかかるうとも、シュラはミリアを抱いたままかわしていく。

涙の跡がのこるミリアの顔を親指で拭った。

「あと巨大な魔力もお前の許可があるまで使わない」

「馬鹿、血出てるじゃん……」

ミリアもシュラの首に手を伸ばし、血を拭う。

もう一度、シュラはミリアの額に口づけた。

そして、シュラは彼女に耳打ちをする。

「ミリア叫べ。そして唱えろ」

ミリアは無言でうなづく。

「我が真名・ファーミリアの名を以て命ず、魔神・明王アスラよ――」

「我が真名・ファーミリアの名を以て命ず、魔神・明王アスラよ――」

ミリアはシュラの言うことを復唱する。

ミリアがシュラを見上げると、良く出来ました、といわんばかりの顔を浮かべていた。

ミリアは暗闇につごめく先を見つめ言う。

「その目の前の敵を討ち滅ぼせ」

「……御意」

シュラはミリアを離し、暗闇に向かって歩き出す。
そして、床に跪くと彼の回りに魔法陣が現れた。

部屋がオレンジ色に明るくなり、ミリアは初めて食人木の全様を見ることとなった。

食人木は見上げるような高さで、深い緑色で教室の天井一杯を埋め尽くしている。

そして、正面の幹の部分では、青紫色の唇に沿うように生えた鋭い歯が見えた。

人間など丸飲み出来るほどの大きさだ。

うなる蔓が叩きつけるように、左右からシュラを襲う。

シュン、風を切るようにしなり、太い巨大な蔓が振り下ろされた。

しかし、蔓がシュラに当たる瞬間、彼の魔法陣から激しい勢いで火柱が上がる。

遠く離れていたミリアも激しい熱風により、思わず目を閉じる。
彼女が恐る恐る目を開けると、目の前には火の海が広がっていた。

そして、その中心に立つのは、明王・アスラ。

彫刻のような一切無駄のない立派な肉体には、炎の衣を纏っており、身体からも炎が立ち上る。

筋肉質な手足には金色の緊箍児きんこじのような宝具が身に付けられ、動くたびシヤラシヤラと鳴った。

「すごい……ちから……」

「まあ、炎の眷属第4位だからな」

アスラはわざわざ振り返り、笑った。

彼はこの力を隠して、ミリアの傍にいたのだ、友達として。

しかし、このように褒められて無邪気に笑う彼を見ると、中身はシュラなんだとミリアは思う。

「……貴様は許さんぞ、低俗」

向き直った彼は恐ろしく冷たい声で言い放つ。

この空間が震える。

「灰にしてやろう、ありがたく思え」

アスラが右腕をスライドさせると、5つの火球が生まれた。

灼熱のそれは食人木の幹や口、天井の蔓に向かって飛んでゆき、

爆発する。

そして、アスラが右腕を伸ばし指を鳴らした。
その瞬間、火球の当たった場所から、轟音とともに火柱が立ち上った。

上からも下からも左右からも火柱に焼かれ、食人木の耳が痛くなるような悲鳴を残し、一瞬にして灰となった。

真っ黒の消し墨となった食人木をアスラは蹴飛ばし、魔法陣を見つける。

「ミリア」

ミリアは食人木の断末魔にくらくらになりながら、アスラの元に駆け寄った。

「この対処はお前の方が上手いからな」
「無効化しちやえば言い訳？」

「そうだ。そうしないと続々と低俗魔が上がってくるだろう」

なるほど、とミリアは魔法陣の処理に取りかかった。
簡単な術式だったが、簡単な術式なのにそれに無理をさせて強力な使い魔を呼び出そうとしていたようだ。

まず正しい式に描き直してから、停止させた方がよいだろう。

「……ミリア」

突然アスラから名前を呼ばれ、ミリアは驚きながら振り向く。
彼は燃える炎のように激しく、しかしとても優しい。

深紅の瞳がミリアを見下ろす。

「作業しながらでいいから、俺の話を最後まで聞いて欲しい」

最後まで、と彼はもう一度強調した。

「俺はお前との契約はとても大切なものだと思っている。
最初はそう、ただの暇つぶしだった。友達ごっこに付き合えばこ
んなに素晴らしい魔力が貰えると。」

滅多にこんな極上の魔力をこれほどの得ることはないから」

落ち着いた声で彼は言った。

「ただお前と友達として付き合っていくうちに、喜びが生まれ、楽
しみも生まれ、毎日がとても華やいた。」

ミリアの横は心地よく、それまでとは比べ物にならないくらい楽
しくて、人間の多くのことを学んだ。

だから俺はこの学校でお前が学んでいくことに賛成したんだ。俺
自身、学ぶということが有意義なものだったから」

おそらくミリアと契約し、友達として彼女とともに人間界で生活
することが多くなったのだろう。

ミリア自身、彼がどのように暮らしていたが覚えていない。

彼は上手く悟られないように行動していたのだろうか。

そして彼は何を思いながら過ごしていたのだろうか。

「しかしこの学校には思っていた以上に危険があった。だから”友達”としてお前を守ることに限界を感じたんだ。

俺は、ミリアを守りたかった。でもこのままじゃどうすることもできなくて、学校をやめさせるしかない、って……」

彼は考えながら言葉を紡いでいく。

その中には彼の悩みが感じられて、ミリアは申し訳なく思う反面、とても嬉しかった。

シユラはここまで自分のことを心配してくれていたのだと。

ミリアの視界が滲み、涙がこぼれる。

ミリアは嬉しかった。ここまで心配してくれる人が傍にいたことが。

「俺のせいでミリアを悲しませたのなら謝る。

でも忘れないでくれ、いつまでも俺が守りきれぬ訳じゃないってことを。

ミリアが死んだら、俺が一番悲しむということを」

ミリアが顔を上げると、こっぴどかしいことを言ったにも関わらず、凜としているアスラがいた。

それだけ、先ほどの言葉の真剣味も感じられたし、彼の心から言葉だとわかった。

ミリアはアスラの胸に飛び込む。

炎なのに全然熱くない、温かいアスラの体躯。
優しく抱きとめる立派な腕。

ミリアは彼の胸に顔をうずめた。

「うん。今まで本当にありがとう。でも私は絶対辞めたくないんだ」

感謝と決意の言葉。

「絶対」

一つため息をつく、彼はミリアの髪を撫でた。

「そうか。そうだな、お前は一度決めるとそれに突っ走るタイプだからな」

今までの経験からの言葉にミリアは安心する。

やっぱりシュラなんだと。

彼も文句は言うがいつだってミリアを認めてくれていた。

ミリアは顔を上げ、言いそびれていたことを添える。

「炎の眷属第4位だかなんだか知らないけど、シュラはシュラで、アスラなシュラもシュラなんだから、今までと何も変わらないよ」

「ずっと」

。

「……盗み聞きですか、レペンス君？」

「わあはっ！ アルマロス先生いつからおられたのですかー」

西の塔地下二階。

蔓や根が枯れ落ち、床に転がる。

レペンスは5号室の横で中のやりとりを聞いていた。入りにくいということもあってか、一部始終聞くことになってしまっている。

レペンスは困り顔で言い訳をあたふた述べるようになってしまった。

「ほほほ、良きかな良きかな」

アルマロスは中の二人の様子を見て微笑む。

「使い魔と契約者と（ふたり）の友情ですか？ 非情に興味深いです。」

明王アスラほどの力を持つものを長きに渡り顕現できる魔力、それに加えここまで……」

レペンスは教室内に目を移す。

よく手伝いをしてくれる、ラセッタという魔法文字専攻の生徒だ。そこまで突出して素晴らしい生徒ではないにも関わらず、上位の使い魔との関係は良好だ。

不思議だと、レペンスは首をかしげる。

「このことはわしと君との秘密じゃよ。明王はここまで我々に尻尾

を出さなんだ。

それは彼女に普通に普通で平穏な生活を送ること望んでいるからじゃろう」

アルマロス近くの枝を拾う。

「それはどういうことでしょう？」

レペンスからすれば、素晴らしい魔力を持ち、優秀な使い魔を従えているのなら、もっと様々なことを目指せるのではないかと思っ
た。

もっと色々な、自分のしたいことを。

察しの悪いレペンスを見ながら、アルマロス笑った。

「……ほほ、明王は嫉妬深いということじゃ」

。

「あしゆらにしてほしーこと？」

「そうだ」

木漏れ日が温かな昼下がり。

大きな模造紙の上に描かれた色とりどりの魔法陣。
その上に褐色の使い魔は胡坐をしていた。

その背には少女が楽しそうに抱きついている。

「うーん、じゃあ私とお友達になってよ。死ぬまで」

「ほおう、対価は魔力で良いか」

契約の内容などどうでもいいかのように、使い魔は提案する。

「本当にずっとお友達でいてくれるの？」

少女は確認するかのように使い魔に尋ねた。

「ああ、契約の内容には嘘はない」

「じゃあ、全部でもいいーよ」

間髪いれず答える少女に使い魔は驚き、身体が跳ねる。

そして、背中に抱きつく少女を膝に座らせ、先ほどの答えを確認する。

「……それはやめておけ。将来恨まれたらかなわぬ」

真剣な使い魔の視線にたじろいだのか、少女は視線を落とし、唇をとがらせる。

「む。じゃあ、ちよっととつとく」

「ふむ、では契約を開始する」

それはある晴れた日――。

温かな木漏れ日の下、二人は出会った。
それは、小さな、小さな出会い。

少女はまっすぐ手を伸ばす。

赤く、燃える、背の高いものへ――。

- F i n -

(4) (後書き)

ここでお話は終わります。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

これはムーライトノベルズである素敵悪魔小説を読みまして、萌えが滾りましたので、2日で書ききりました。頑張りましたw 18禁ですので、紹介は割愛させていただきますが、とても好きな作品です。作者様ありがとうございました。こんな所からすいません。

実は続きも考えていたりするのですが、設定だけ考えるのが好きな人間ですので、形にするのはだいぶ後になりそうですね。こちらも、ちまちまと空いた時間に描写がへたっている所を加筆修正していきたいと思っています。

大変読みにくかったと思いますが、こんなところまで読んで頂きありがとうございます。

視点がころころ変わったり、描写が薄かったり至らない所だらけですが、萌えと燃え(炎だけに)だけはふんだんに盛り込んだつもりです。

感想・叱咤激励・誤字脱字の報告など頂けたら嬉しいです。

では、また手にとって頂けるような作品を書けるよう努力してまいります。失礼します。

春夏 愁

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420y/>

炎の悪魔とエトセトラ。

2011年11月28日03時04分発行